松本 寧 至

笑いはもっとも人間的なもので、人がさまざまであるように、笑いもさまざまに人間的であるから、哲学の命題にもな
るし、文学の題材にもなる。
身分のある人が、身分のない人のように振舞うのを余裕をもってみる、まことにおかしい。また偉い人がある種の動
物に似ていたり、ある動物のしさが、ある地位のある人の物騒に似ていたりすると、その動物と同格になったようでお
かしい。

『今物語』には、軽妙な説話が多い。笑話というべきものも多い。どぎつい風刺というのではなく、軽い笑いである。失
敗を痛烈に笑殺するのではなく、おおおやささまで野暮だったの、という親しみももった笑いである。

作者は藤原信実といわれ、信実は歌人としても知られるが、似せ絵画家として著聞している。いわゆる肖像画家である。
ったことな、柄本正弘とか斎宮女御なども含めている。結世の美女小町の場合は後姿を画いて鑑賞者のところ、信実がその実影を画き奉ったことなどもある。当時の人物の似せ絵も多く画像っている。中殿御会絵巻（但し、現存本は模本）もあり、後鳥羽院が陰陽師をうたわれるという。しみじみと時間的に述べるより、ばっと写すという具合になる。ぶっと一瞬を映すというか、人生の深みとか悲しみを、あるいは喜びをとらえないというのでない。あるいはこれ、説明的ではない。その時の動きや、心を写しとることである。数はあけぼの、やうやく白くなり行く山際すこしあかりて、紫だちる雲のはそくたなびきたる。春はあけぼの、やうやく白くなり行く山際すこしあかりて、紫だちる雲のはそくたなびきたる。春はあけぼの、やうやく白くなり行く山際すこしあかりて、紫だちる雲のはそくたなびきたる。春はあけぼの、やうやく白くなり行く山際すこしあかりて、紫だちる雲のはそくたなびきたる。春はあけぼの、やうやく白くなり行く山際すこしあかりて、紫だちる雲のはそくたなびきたる。春はあけぼの、やうやく白くなり行く山際すこしあかりて、紫だちる雲のはそくたなびきたる。春はあけぼの、やうやく白くなり行く山際すこしあかりて、紫だちる雲のはそくたなびきたる。春はあけぼの、やうやく白くなり行く山際すこしあかりて、紫だちる雲のはそくた

後鳥羽院までその意味では、「かかし」とある。この「枕草子」をもって平板にしてゆるやかにしたのが、中世の「弁

内侍日記」であり、この女房は、「おもしろ、おかしく、宮廷生活を書いている。それも歌をまじえた短篇である。そのような書き方、心を写しとることである。記念写真的な

瞬間に変えるものは、「あはれ」である。ほどらうちって行巻して行く趣は「かかし」とある。この「枕草子」の基調は「かかし」とある。この「枕草子」の基調は「かかし」とある。この「枕草子」の基調は「かかし」とある。この「枕草子」の基調は「かかし」とある。この「枕草子」の基調は「かかし」とある。この「枕草子」の基調は「かかし」とある。この「枕草子」の基調は「かかし」とある。この「枕草子」の基調は「かかし」とある。この「枕草子」の基調は「かかし」とある。この「枕草子」の基調は「かかし」とある。
画家としての一面が「今物語」という形で表現されたのではなかったか。

「今物語」という説話集もそうだろうんだものではない。見聞したことをさらりと書いて、ああそうか、と思わせるにかで

第四十五話もそうした説話の一つである。風流を解する従儀師と、硬い一方で、それがいったい何のためか、その意義すら忘れてしまえばほど緊張しさけている執行とのやりとりである。花見のためである。花散っていた。御幸と言えば、清掃しなければならない。手配を命じられた従儀師は、落花の風情もなくかで、これを手目にかけたらどうだろう、というゆとりがある。なぜで

緊張したて花見の意味する見失った執行と、余裕のある従儀師との対照。余裕をとりもとすところか、あらぬ言葉まで

吐いて叱りつける。なんてこった、ということになる。

本文はこうである。

鳥羽院の御時、花のさかりに、法勝寺へ御幸ならむと申しけるに、執行なりける人、みてとくま立ちけるに、庭のう

へに、所もなく花ちりしきたりけるを、「ああなござかりしきとしも、たと今御幸のならむとするに、いままで庭をはかせばなりけ

る」としかるはらたち、公文の従儀師をめして、「いままでいかにさうをはせぎりけるぞ。ふしぎなり」といひけ
それは、ついひざまづきて、
ちるもうし散しく庭もかなうし花に物おもふ春のこ
【諸本・
と申して、「こや、御房がはき侍らぬに」などでひければ、「はっかつ
ひ」といひて、猶しかりける。
この歌の意は、花が散るのも惜しめ、せっかくの御でましですかお掃除も
とは思いますが、庭一面に散り敷いた花びらを掃いてしまうのも惜しく、
花のために、どっちにしようか物思いをしているのですよ。この風流な春
の守衛さんのおたくは、この歌には、
殿守のもの宮つこ心あらず此春計期清めな
本歌があって、【宝物集】に、
此歌、世紀に宇治大納言隆国の物語には、小野宮殿実頼の座に
おはしけるに、南殿の花面白く散けるを見給ひて、只今庭御門中納言
のまわれよかしとたばれ給ふを、敦忠収参り給へりければ、
まいかに居も定り給はぬに、【あの花はみ給ふか、をこそ】との給ひければ、
ば、かく読給へり。拾遺・金葉両集には、【源公忠】とあり、又公忠が
もっとも世紀といえば【栄花物語】五鏡にあたるが、いずれにも
——今物語絵巻より——

—103—
この説話をは。『拾遺集』『金葉集』にありというが、『金葉集』に篇見えない。
『字大納言隆国の物語』というのをかりに『今昔物語集』とすれば、その巻第十四『敦忠』中納言・南殿ノ桜ヲ説和歌語

第卅二ニに次のようにある。
小野宮左大臣実顕が左大臣だった時、三月中旬参内したところ、南殿の大木の桜が見事に咲いて、『庭ノ隙無散り桜、何ガ見給フ』
風ノ吹き部立ッ、水ノ浪ノドノ様ニ見ツガルト、すばらしい、こんな見事に咲いているのは例年ない、土御門中納言敦忠

大士、──極興有ル事カナト喜び給ヲ程ニ、中納言参テ、座ニ居ル雅各ト、大臣ノ代ノ女ノ庭ノ散ノ桜ハ、何ガ見給フ

有ケバ、中納言、現ニ、譲フ候ヲ伸シ給ニ、大臣ハ、然ノ事ヲトハ、�ryfallヲ代レテ、中納言、此ノ花ノ庭ノ散ノ桜ハ、何ガ見給フ

ノ大臣、今ノ庭ノ散ノ桜ハ、御座ス。其ノ桜ヲ見マレハ、其ノ桜ヲ見マレハ、其ノ桜ヲ見マレハ。

一ノノモリノモリノモリノキャンツクハハ、何ノ花ノ庭ノ散ノ桜ハ、何ガ見給フ

此ノ事ヲモリノモリノモリノキャンツクハハ、何ノ花ノ庭ノ散ノ桜ハ、何ガ見給フ

臣、此ノレハ聞給ニ、極ヲ謡給ニ、此人ニ返り、更ニ否ハ為ジノ、劣ヲミノ、長ノ名ナルベシ。然リテ、増ノサハサノ事ハ可有

此ノ物語』は、説話をかちこの一ノ歌からモ歌語をとっている。
すなわち、「トノモリ」が『春のところり』であり、『アサキヨメスナ』が『はかまうし』であり、『花に物思ふ』が『初

『物語』は右の故事を記念においている。いままでいかにさうをはせざりけるぞ。ふしがなり」も、『

それをしてもあろうに、このたわけものに、という口きたない言葉を吐いた不風流を通りこした執行に、今はこう

だ、このたわけものめが、手口汚くのしつたというわけかも知れない。この押しのかたちで、作者がつけ加えたのは、ここまですいうことは、無風流もきわまった、というところであろうから、

笑いの落ちとしての罵詈があり、これは下品ではあるが、内論では、そう罪のない悪態だったのだろう。

校注本文では『はかみつひ』となっている。古いところで『有朋堂文庫本』では『宇治拾遺物語』と合冊になっている
か、その頭注では、

は □（）つぴ □のつぴ □
不詳

とする。校注本の頭注には、

親をはずかしめる罵詈の一種であろう。とし、その補注（□□）では、「無風流、無教養な人物が、風流を解する者に向ってあるまじき言を吐いて恥の上塗りをした話をあると思われる。」とするのはその通りである。そして、

「は □（）つぴ □つぴ」における語そのもののきっかけりけり、引師の歌の解釈できず口答えするなど驚ったものか、あるいは「は □（）つぴ □つぴ」と形の、罵詈の語とみる方がよい。

母開

すでに増澤池子氏がこんなふうに記したのは、示唆に富んでいる。

「掃く」のつぴという文句である。

斎藤がひらオリジナルという述師の口答えに応じて、

執行が、それはお前の母のつぴ（屎）だ、の意をこめて「は □（）つぴ □つぴ」という文句を取除くのが惜しいという気持ちで、

掃除が大袈裟でいやだという気持ちを兼ね合わせている。なお、さま戸さん、お前の母を

くからおぞらく女性と交渉をもつの意が生じてくるかと思う。僧侶の抑圧された感情のハケロがこんなところに
も出ていることがわかる。

増減の解の妥当なのは、「はさかつひ」を「母が鬼」と解したところである。「母が鬼」からさかのぼってこの歌を解することは、「はさかつひ」ということになる。現在でも「鬼は鬼」ということになる。

「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかつひ」が解されなかった時代の考察から、「はさかた
清がいうには、「時々観々に悪口を吐き、母開に懸命放言し」したのは許せないとし、久成の悪口を厳重に取締ってはし

『中世法制史料集成』巻「御成敗式目記事書集要」所収の『池辺本成敗式目注』には、「悪口ノ咎ノ事」があり、悪口の咎

は不孝の罪通り準えて重罪であるとしているという。そして悪口がよくないのは、一方で「親まき」といえば、人をた

しらく、雑調して酒宴となったというのがある。

『古今著聞集下』の頭注で、『栄性法眼め、おやまけ、olog』について、「親枕く」と母親と通じた意を語源とす

ける論者葉か。とすれば不徳義漢、極道者、助平野郎の類語」とする。

もうひとつは、築地を訪れていた職人たちが、当時有名な説経師聖覚の噂をしていった。そこで聖覚の乗る興行通り

かかった。聖覚の力者法師がききとつめて、「おやまけの聖覚」、はまきの聖覚や、はまきの聖覚や、職人たちをのせった。職人たち

をのせたのはが、聞いていた聖覚とすれば自分がわれているような気がした。職人たちをのせたのはが、聞いていた聖覚と

せている。笠松氏は、なぜ「おまぎき、はまぎきの下に「聖覚」の字をつけたのかかからない。そして、「おやまけ」、職人たちをのせたのはが、聞いていた聖覚と

かせてもいながら、揚足をとるようで申訳がたいが、おやまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はまきの、聖覚や、はま

の言うにそのようなものがあり、それがたまたま主人公の名と語呂合わせになったからかとす。そして、なぜか当

時、薬師にそのようなものがあり、おおさんが御主人様を静かに、聖覚々々という「もんじゃねえ」といったところであろう。説伝の名
さて、「おやまき」、「はまき」は、わが国古代の「くにつみ」の一つである。「己が母犯せる罪」に源を発し、「母間」

「おやまき」が、かっては氏族や部族全体に繋がれをもたらす薬屋べき「つみ」の名であり、軽々しく口にすることができないかったタイピの系譜をひくものと考えてよいのではないか。と笠松氏はしている。笠松氏はまた鲁迅の隨筆をも要約され、在した人々に対して反抗的に「他媽的」をつかう。中国は本当に平等になるように改造しない限り、永遠に無声、有声のこの「国罵」はなくならないだろう、という憂国の至情の吐露となる。この言葉を発明した人は卑劣な天才かも知れない。

ただこの言葉はもっとも親愛の意味でも使われるべきである。「国罵」はあたらしい支配階級こそ、なおのこと卑劣だ。

それゆえに、「国罵」をあびさせる支配階級こそ、なおのこと卑劣だ。

「国罵」はあたらしい支配階級こそ、なおのこと卑劣だ。
父子が「咱の」やりとりするところは、ちょうど高倉茂通と栄性法眼のやりとりと同じだ。
「栄性法眼め、おやまけ。」といい、雑談になり、酒宴になったのに似ている。それでも「知音もかか
る事や待てやい。人の利口にてありげるやらん。」ともいっている。やはり相当きつい業言だったのはちがいない。
女が偽の栄性坊主、いるか。なんだ。茂通の馬鹿か、まああがれ、といったところだ。これは「古今著聞集」の「興
利口」のところで、つづいて栄性は、「一間を隔てて尼と一緒住んでいて、
この事のしたく取りける時は、二人とも、前をかきあげて、「一尺すむの小仏、頭をふりて参りたび」といい、
ニがもとへあゆみ行けば、この尼、取りあへず、また前をはだけて、「三間四面の小御堂、御戸ひらきて参り候」と
いったおまえまでついっている。但し、この段抄入である。念のため。
さて「今物語」にもとる。無風流な執行は風流の従師を、もちろん従師が風流だとと思わなかった。「おめでた話」といったことになる。「母開」はきつい言葉だが、順藤は場
合によってちがってくる。こうのした報告従師は不快ではあったろうが、そうかといって訴訟に及ぶほど根にいった
わけではあるまい。
但し、時と場合によって大問題に発展することは、その状況による。「バカローレ」一言で議会が解散になったともあ
るが、親子のあいだでその程度のことはある。
だが、散る花を惜む従師と、コチコチになって清掃して御幸を御むかえるようしている。
上の権力に弱く下の者
に威張る行動との対比はおもしろい。「今物語」も連想の系で編まれていて、つぎの四十六話もこの類話である。住吉神社の
吟詠する歌をみる度に捨ててしまったので、神主はなげいた。そこで散った老尼が、
世の中のうつりにけやれば住吉のむかしの跡るさやけり
と詠んだ。作者は、「これは承久の乱のち、世の中あらたまりける時のこと」としている。
『今物語』はその題のように「今」を書いた物語である。第四十五話の場合、「今」といった意味で、「現在
」という意味で、「四十六話と類話になるように、現在にも立派に通用する『今』話なのはあたらない。
今は昔の物語が親愛の情をあらわすものというのはどうかと思うが、心許しあった間柄ではあっ
たのであろう。他人行儀のところ、もしくは公式の場合
に、恥日の言葉は許されない。しかも、親しい間柄では、口に悪いことをいってもそれが親愛の心を示すものと
なる。『今』も、元来は同様で、『母たわけ』『母たわけ』の罪で、タブーであった。それが、何となくただの罵言として
使われるようになった。
風流が風流でなくなった。タブーがタブーでなくなった。その結果は、中で笑いである。一瞬の笑いである。
よく生を捉え
『今物語』は、そういう昔とちがっていまった『今』をとらえている。否定しようが肯定しようが、生きているのは『今』でしかない。フィルムの一齢のように生をとらえ、確認しているのが『今物語』である。『仕様がねえなあ』、読覧にも似た作者の人間愛である。

笠松氏の論考にほとんど倚りながら書いて来たので、いささか気がひける。

そこで、ひとつ、使われる場所によって罵呪が親愛の意味をもってくる例を加えておこう。山田詠美氏の作品から、英語。

黒人脱走兵スプーンが、逮捕され、連行される直前の女主人公との会話である。

ベッドタイムアイズのその別れの場面は、高雅で猥褻さが渾然一体となって詩的ですらある。

久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾章江校注『今物語』隆昌社『東舞随筆』三弥井書店、昭和五四年五月刊。

小泉弘、山田昭他校注『今昔物語集』宝庫集刊居友、比良山古人著『新日本古典文学大系』岩波書店、昭和七七年十月刊。

山田孝雄他校注『今昔物語集』四日（日本古典文学大系、岩波書店、昭和五年一月刊）

増島典子『現代語訳』『今物語』（井の里）第十一号昭和五年一月刊。

注

⑥ 西尾光一、小林保治校注『古今著聞集』新潮日本古典集成一九七六年、高倉家相茂通と私性の眼と交遊の前後をの事（抄入）

⑦ 他説の！について松枝茂夫『魯迅選集』第十五巻（岩波書店、一九五七年五月刊）
河出書房新社、昭和六年十一月刊。「アメリカ民俗語辞典」（The Under Ground Dictionary）原編著ユージンE・ランディ訳編者堀内克明、昭和五年三月の現代のそれに関当する語の意である。ひらがえってみれば、このようなところからも「今物語」の当世性が垣間見られようと思う。昭和五年一月の第八版に訳した。